モード・ダイヴァーの『リラムーニ』
——アングロ・インディアン・ロマンスの可能性を探る——

川　端　有　子

1．はじめに

2004年、オックスフォード出版局から、ほぼ忘れ去られていた世紀転換期のアングロ・インディアン女性作家、モード・ダイヴァー（Maud Diver）の『リラムーニ：可能性を探る』（*Lilamani: A Study of Possibilities* 1909）が再版出版された[1)]。この背後には、インドやその他の国々におけるポスト・コロニアル小説の発展に伴い、それらの先駆、あるいは反面教師という意味で、植民地下で書かれてきた小説に見直しと再評価の必要性が生じてきたという事実があることは疑いもない。ではなぜ、『リラムーニ』であったのか。ダイヴァーは、インド在住の軍人を主人公とした帝国主義的な冒険ロマンスで主にその名を知られ、代表作は『デズモンド大尉VC』（1907）以下、その続編であるとされている。しかし、『リラムーニ』は、インドではなくイタリアとイギリスが舞台として設定されており、イギリス貴族の息子とハイ・カーストのインド女性の結婚、そしてその行く末を描いたロマンスであり、彼女の他の作品とは少々毛色が変わっている。

だが、『リラムーニ』の独自性を語る前に、まずはダイヴァーの時代に多く活躍していたアングロ・インディアンの女性作家たちと、彼女らの手によるアングロ・インディアン・ロマンスについて、概観しておく必要があるだろう。

2．アングロ・インディアンの女性作家たちとその作品

モード・ダイヴァーはラディアード・キプリング（Rudyard Kipling）の影響を受けたアングロ・インディアンの女性作家たちのひとりである。1890年代から1920年代にかけて、これら宣教師や軍人の妻としてインドに暮らした女性作家たちは、いわゆるアングロ・インディアン・ロマンス、つまりエキゾチシズムあふれるインドのイギリス人社会を背景にした恋愛

小説や、不可思議な習俗・宗教や異質な自然にインスパイアされた幻想小説を発表していた。アリス・ペリン (Alice Perrin)、ビシア・メアリ・クローカー (Bithia Mary Croker)、フローラ・アニー・スティール (Flora Annie Steel) らが代表的な例である。すべての作家が非常に多作であり、イギリス本国とインドのイギリス人コミュニティ双方において非常に多くの読者を獲得していたにもかかわらず、センティメンタルでセンセーショナル、しかもかなり帝国主義的、人種差別的な含みを持つ彼女らの作品は、いまや忘却の彼方に置き去りにされ、ほとんど顧みられることはなくなっていた[2)]。

したがって、彼女たちの生涯や作品についての先行研究は、長い間、極めて少なかった——というよりは、研究に値しないと軽視されていた。数少ない例外のうち、早い時期にはブーパル・シン (Bhupal Singh) が、*A Survey of Anglo-Indian Fiction* (1934) の中で、項目を立てて彼女らの生涯と著作のそれぞれの特色を簡単に概観している。これによると、モード・ダイヴァーは、軍人の妻としてインドに長く暮らした経験から、特に北西辺境地帯の軍事基地の知識にたけており、アングロ・インディアン社会の人間関係の機微を魅力的な表現で描くすべを心得ていたという (Singh 111)。また、インドの自然の雄大な美しさに打たれ、人間ドラマの背景に描きこんだ作家でもあったらしい (Singh 113)。

だが、シンの本は概略に過ぎず、アングロ・インディアンの女性作家を取り上げた本格的批評は、ベニータ・パリー (Benita Parry) の *Delusions and Discoveries* (1972、再版1998) に始まる[3)]。この中で、パリーは "The Romancers: Five Lady Novelists" という章を立て、F. F. ペニー (Fanny Farr Penny)、ペリン、クローカー、ダイヴァー、I. A. R. ワイリー (I. A. R. Wylie) の五人の作家について考察するが、個々の作家にも作品にも差異を認めず、そのわけを次のように述べている[4)]。

> The romantic writers, whose books are grouped together because they are virtually indistinguishable, reveal a community's norms and troubled apprehensions of India, and are principally interesting as symptomatic of Anglo-Indian attitude. (Parry 32)

60年代の、独立の気運の中で書かれたパリーの著作は、これらどの作

家もイギリスのインド支配の正当性を疑うことなく、皮肉も交えずイノセントにアングロ・インディアンの偉業を讃えるのみで、その型にはまった理解は表面的なものにとどまると批判している（Parry 95）。これらの女性作家たちは、インドに住んでいたという経験を盾に、神秘の国での西と東の出会いを描いたが、結局それは東西の対話ではなく、西側のモノローグであり、独りよがりに過ぎない、というのがパリーの主張である（Parry 8）[5]。

しかし、1998年の再版にあたって、パリー自身が序文において認めているように、*Delusions and Discoveries* は、いくつかの限界を抱えている。パリーは、グロテスクな儀式、神秘的な呪い、闇に潜む獣といった暗黒のインドの表象を、まったくの「モノローグ」であり、偏見の押しつけと断罪したが、パトリック・ブラントリンガー（Patrick Blantlinger）やスティーヴン・アレータ（Stephen Arata）は、そこに帝国自体の腐敗と堕落が反転した形で照射されていることを見抜いた[6]。たとえば、*Rule of Darkness*（1988）の中で、ブラントリンガーは、クローカーの短編「小さな青銅の神」を取り上げ、ヒンズーの神の呪いに、逆照射された帝国の不安を読み取っている。

また、パリー自身認めるように、彼女はジェンダー問題が、人種と国家の問題に複雑に絡むという点を議論し損ねていた（Parry 22）。その後、フェミニズムとポスト・コロニアル研究の興隆のもとで、ジェニー・シャープ（Jenny Sharpe）、スーザン・メイヤー（Susan Meyer）、サラ・レッジャー（Sarah Ledger）、ヴロン・ウェア（Vron Ware）らの研究者は、虐げられた人種と、虐げられたジェンダーの間のアナロジー、もしくは逆に、女性の権利主張と帝国主義的拡大の結託について、さらに微妙な議論を繰り広げていくことになる。このような議論の流れでゆくと、アングロ・インディアンの女性作家たちの作品にも、パリーが論じ得なかったような新たな様相が発見されるのである。

その意味で、もっとも興味深いのは、ナンシー・パクストン（Nancy Paxton）の *Writing Under the Raj*（1999）である。彼女はこの研究書の中で、"Mixed Couples: The New Woman and Interracial Marriage"という章を通じて、ペリン、スティール、ヴィクトリア・クロス（Victoria Cross）らのアングロ・インディアン・ロマンスにおける異人種間結婚の顛末を分析し、そこに世紀末から20世紀初頭の女性運動や、ニュー・ウーマンの登場がどう絡む

かを考察しているからである。もっとも、1830年から1947年にかけてのイギリスの植民地小説における異人種間レイプのシナリオを読み直すのがパクストンの目的であるため、異人種間結婚はレイプのシナリオの反転として解釈されており、ダイヴァーの『リラムーニ』は、幸福な結末に終わった珍しい例として題名が挙がっているのみである (Paxton 194)。

この小論で、私はブラントリンガーやパクストンらの例に倣い、ダイヴァーの『リラムーニ』を再読し、種々の「可能性」の探求を試みたい。ダイヴァーが副題に示し、意図的に試みたハッピーエンドの「可能性」のほかに、リラムーニをめぐって展開する、ニュー・ウーマン、オードリーと、イギリス貴族の御曹司ネヴィルの形作る欲望の三角形の「可能性」、また、衰退を迎えた世紀末の貴族階級の後継問題というコンテクストのもとでの異人種婚の「可能性」が確認できるだろう。こうして、滅びた時代の遺産と見られてきたアングロ・インディアン・ロマンスが、ジェンダー、人種、階級問題の議論を展開すべき新たなサイトとして「可能性」を持つことを論じていくことにする。

3.『リラムーニ』による同時代コンベンションの転覆

『リラムーニ』のストーリーは比較的単純である。第一部 "Seed" は、世紀末のイタリアのホテルが舞台となる。母の強要する気に染まない結婚から逃れ、西洋的教育を受けた父と共にインドから出てきた少女リラムーニは、その美しさで、趣味で絵を描きながら無為に日を過ごすイギリス貴族のネヴィル・シンクレアを魅惑した。リラムーニの肖像画を描きたいと申し入れたネヴィルは、次第に彼女を愛するようになり、求婚する。リラムーニはイギリス人女医オードリーに指導されて、医学の道を志そうとしていたのだが、その計画を断念、彼の求婚に応じる。

第二部 "The Blossoming" においては結婚したふたりの幸せな日々と、リラムーニをモデルとして得たネヴィルの、プロの画家としての成功の道筋を描く。ところがこのしあわせは長くは続かない。父危篤という知らせを受けて、ネヴィルは単身イギリスに帰るが、負債を抱えて父は死亡。ネヴィルは借金返済の義務つきで、爵位を相続する。第三部 "The Fruits" はしたがって、舞台をイギリスに移す。リラムーニを呼び寄せ、夫婦のイギリスでの生活がはじまるが、「ネイティブ」の嫁を疎んじる姉をはじめ、

周囲の偏見や文化の違いがリラムーニを苦悩させる。積もり積もった悩みに健康を害した彼女は、インドへつれて帰ろうとする父と引き止める夫のあいだで板ばさみになるが、危うく入水自殺を踏みとどまり、身ごもった子どもを祝福するネヴィルのことばで救われる[7)]。

ナンシー・パクストンが記述しているように、アングロ・インディアン・ロマンスは、こういったインド人とイギリス人の恋愛ロマンスを主題とするものがかなりある。しかし、殆どの異人種間結婚が、破滅や悲劇に終わるのに対し、『リラムーニ』はそこに積極的なハッピーエンドの「可能性」を示した点が、同時代テキストと異なっているといえる[8)]。だがそれだけではない、この作品は同時代のテキストに多用されていたコンベンションを意図的に覆すことで、インドとイギリスのこれからの関係の「可能性」を示す試みだったと考えられるのである。ダイヴァーが意図したこの「可能性」を吟味するためには、同時代に書かれた、よりコンベンショナルな異人種間結婚のロマンスとの比較が役に立つだろう。同年に発表されたアリス・ペリンの『破滅の大河』(*The Waters of Destruction* 1909) は、ダイヴァーのテキストと非常によく似たストーリーをもちながら、対照的な方向性を有していることから、その格好の対象になると思われる。

主人公のイギリス人男性の目にとまる、美しいヒンズー女性、リラムーニのサリーをまとった姿は、ロマンティックなオリエンタリズム幻想を満たす形象で描写され、これはペリンの小説に登場する美少女スーニア (Sunia) と変わるところはない。リラムーニとスーニアが、それぞれの小説の主人公、ネヴィルとスティーヴン (Stephen) の目に、最初にうつるときの描写を次に挙げておこう。

> Sinclair had leisure to approve the delicate curves of brow and cheek and nostril, the slender symmetry of the hand and arm resting on the balcony's edge, the classic poise of the veiled head. For all the gravity of her eyes, a hint of passion in the ripe lower lip, and of willfulness in the round chin that matched it, promised just those varying elements of light and shade that would some day make her all a woman. (Diver 5)

> Stephen was struck with the graceful pose of the young figure, the tender, rounded limbs, the childlike sweetness of detail, the delicate nose and chin,

curved lips, tiny ears, and the silkiness of her fine black hair.... Completely unlike the ordinary village girls of the plains, and it was very obvious that she favoured the Northern race to which her mother had belonged. (Perrin 63)

ふたりの女性は、常に“child”と呼ばれ、若さと無垢を持ちながら、神秘的で官能的な東洋女性という共通点を持っているが、次第に大きな違いが見えてくる。スーニアのほうは、無頓着さ、宗教的不摂生、学び努力することをまったく嫌う怠惰さ、激情に駆られやすく衝動に負けやすい性格であることが明らかになってくる。“the quick emotions and readily-stirred impulses which are so curiously combined with the easy good nature and indolence”(Perrin 59)は“Nautch Girl”と呼ばれる一つのステレオタイプであった[9)]。スーニアはキリスト教の学校に行くよう薦められたとき、‘there is no need for me to go to the mission-khang. I can sew, and I can sing, and I know that, without doubt, the one true God is Ka-liste. What more is necessary?’(Perrin 132)といって拒絶する。

ところがこれに対し、リラムーニはインドの女性としては最高の教養の持ち主であり、西洋医学を志ざし、恵まれないインドの姉妹たちのために尽くそうと勉学に励む向上心の持ち主である。そのうえ、彼女はのちにネヴィルと結婚しても、自らのヒンズー教徒としての信仰を貫き通す。“Lilamani had yet her share of the fighting spirit and fierce pride of her race, that leaped in flame at every word or look from this condescendingly dutiful sister of her husband”(Diver 258)と語られている通り、彼女は、ネヴィルの姉のジェイン(Jane)のさげずみを隠しえない眼差しにも負けない。夫相手にであっても、「アジア的論理」でもって自らを主張する。“It took her a second or so to grasp his masculine and very British point of view; then she challenged it straightway with her Asiatic logic.”(Diver 261)

この意志の強さをもつ女性像は、明らかにスーニア的ステレオタイプを意識しつつ、書き換えられたものである。そのことがはっきりとするのは、兄ネヴィルが「ネイティブ」の女性と結婚したことを知ったジョージ(George)の発言である。彼はリラムーニの肖像画を見て、確かにたいへんな美人であることは認めた。だが彼女が18歳であることを聞いたジョージは、次のような反応を示す。

> But George, … added, with the experienced sagacity of four years' service in India: 'M', yes. From seventeen to twenty native girls are about as alluring as they make 'em, even the commoner sort. The deuce of it is they're middle-aged by thirty. Run to flesh, and—" (Diver 209)

『破滅の大河』においては、結婚して二年後、まさにこの変化がスーニアに起こり、彼女は太ってすっかり美貌を失ってしまう。本能のなすがままに怠惰に日々を送る彼女に、スティーヴンは絶望するが、この結婚によりすっかり「ネイティブ化」してしまった彼は、何をする気にもなれず、そのままずるずると関係を続けていく。明らかに、こういったネガティブな異人種婚観を、ダイヴァーは『リラムーニ』において故意に覆しているのである。

『破滅の大河』においても『リラムーニ』においても、Half-caste とか、Eurasian と呼ばれる欧亜混血の子どもに対する嫌悪の情が広く行き渡っていたことがうかがえる。ロナルド・ハイアムがその著書『セクシュアリティの帝国』(1998) で示しているように、十九世紀のはじめまでは、植民者が被植民地の女性を、いわゆる現地妻にすることは、むしろ奨励されており、混血児は非常に多かった (ハイアム 156)。はじめの頃、植民者はその子どもの養育と教育には責任を取り、イギリスに連れ帰って後継者にする例もあったという。しかし、東インド会社なきあと、帝国がインドを支配するようになったヴィクトリア朝では、そういった結婚も、そこから生まれた混血児も、両方の人種から蔑みの対象とされるようになっていた (Naik 54)。リラムーニの父も、"those children suffer the stigma of half-breed, which Nature herself is said to abhor" (Diver 117) と述べている。だが、この取り扱いについても、二つの作品は際立った対照を見せる。

ペリンの作品の第二部で、スティーヴンとスーニアのあいだには男の子が生まれる。ヒンズー社会はとりわけ男子を重んじるため、スーニアは、得意の絶頂に登りつめるが、父スティーヴンはわが子を泣き喚く "little black and yellow creature" (Perrin 159) と呼び、嫌悪感なしには見ることができないでいる。この子どもが川で行方不明になって死に、またスティーヴンがイギリスに帰っているあいだに (都合よく) 起こった大洪水に、スーニア自身も飲み込まれてはじめて、スティーヴンは異人種間結婚による「汚染」から身を清め、ふさわしい初恋の相手であるイギリス人女性ジョ

ージイ（Georgie）と再婚して人生をやり直すことができるようになる。同様の破局に終わる異人種間結婚の結末に、しばしば水による死が、人種間の境界を逸脱した存在を「清める」ものとして描かれるのは偶然ではあるまい。

入水自殺の可能性は、『リラムーニ』にも二度、描かれる。一度はコモ湖のほとりで、ネヴィルの求婚を受けるべきか否か、果たして自分はイギリス貴族の男性の伴侶として相応しいのか、悩んだリラムーニは、一時的な狂気に駆られ、身を投げようとしてネヴィルに救われる。もう一度は結末近くである。ここに混血児の問題が絡んでいることが注目される。そもそもリラムーニが、この結婚がシンクレア家にとって持つ意味を悟ったのは、彼女が思わず盗み見してしまった、ジェインからネヴィルにあてた手紙を読んだ時だった。

> "Had you no thought for the future? A native mistress at Bramleigh Beeches! Half-caste sons to carry on the name of which we are so rightly proud! In my opinion father would be justified in cutting off your inheritance; even in cutting you off with a shilling!" (Diver 180)

幸か不幸か父は死に、ネヴィルは廃嫡されるどころか後継者となったのである。"half-caste sons" ということばはリラムーニの脳裏に繰り返し響き渡り、息子を欲しながらも、その子どもは人々に——父親にすら——忌まわしいと見られる混血児にならざるを得ないという事実が彼女を苦しめるのだ。そして妊娠の事実を悟った彼女は、父と夫が彼女の健康をめぐって論争しているのを漏れ聞いたその晩、海辺へ出て行く。

追いかけたネヴィルは、コモの狂気を繰り返さないと誓ったではないかと彼女を責め、最初は息子がほしくはなかったのだ、と正直に自分の気持ちを告白した。しかし、甥を可愛がるリラムーニの姿を見て、心が変わったのだと。

> "When I say you that night, worshipping that other Nevil, who was no son of mine, a rage of jealousy flamed up in me; and I knew—not quite then, but afterwards—that no narrow prejudice of race could come between me and the need to see you so, with a son who should be yours and mine." (Diver 335)

理解しあえたカップルは、ふたたび愛の誓いを交わして物語は終わる。この結末の海辺のシーンは明らかに、従来の異人種結婚物語の破局場面を意識しつつ転倒していると考えられる。

こうして見てきたように、『リラムーニ』が、キプリングの有名な詩行 "East is East and West is West, and never the twain shall meet" ('The Ballad of East and West') に対し、オールタナティブな「可能性」を提示しているということは、オックスフォード新版の序文でラルフ・クレイン (Ralph Crane) とラディカ・モハンラン (Radhika Mohanram) も述べている通りである。だが彼らも指摘している通り、ネヴィルが "East and West are not antagonistic, but complementary: heart and head, thought and action, woman and man. Between all these 'pairs of opposites' fusion is rare, difficult, yet eminently possible. Why not, then, between East and West?" (Diver 171) と問いかけるとき、そのことばはキプリングの詩句を問い直しつつ、ダイヴァー自身の限界をも暴露してしまっている。

ダイヴァーは、異人種間結婚が帝国の基盤を揺るがす脅威であることを知りながら、『リラムーニ』においてはその脅威自体を骨抜きにして見せたが、はからずもこの対句に隠された不均衡が、その前提になっていることは見逃せない。つづいては作品に内在する限界と、反動性を探っていくことにしよう。

4. 『リラムーニ』におけるノスタルジックな反動性

先ほど引用した、ネヴィルのことばから明らかであるように、西と東はまったく違うものと捉えられ、補足関係にあってこそ、両者の最善の形が発揮できると主張されている。表向き、西の優位性を押し出すことなく、東洋文化に等価の価値を与えているように見えるところがダイヴァーの「進歩性」なのかもしれないが、心と知性、思考と行動、女性と男性というアナロジーが図らずも指し示しているのは、ヴィクトリア朝の「分離されたジェンダー領域」についてのレトリックである。サラ・エリス (Sarah Ellis) の手引書や、ジョン・ラスキン (John Ruskin) の講演録 *Sesame and Lily* (1865) に端的に表わされていた、女性は精神性をもって家庭内に君臨し、男性は行動性をもって家の外で支配し、それぞれがそれぞれの持ち場で、各々の特性を生かし、「補足しあう」ことこそ、最上の生き方であ

ると説いたジェンダー観が、女性の力を讃えるようなそぶりをしつつ、その知性や権利を侵害していたことはいうまでもない。『リラムーニ』におけるネヴィルの東西観は、まさにこのヴィクトリア朝的ジェンダー・イデオロギーを裏書するものに他ならない。二つの対立項が明らかに不均衡なパワー関係を担っている限り、補足と融和は幻想に過ぎない。ネヴィルとリラムーニの関係が、視る者と視られる者、画家とモデル、結婚によっておとなの責任を引き受けた男と、つねに“Child”と呼ばれる幼な妻に終始することも、この関係の不均衡性を証明する。

また、ネヴィルの対句は、それ以前にリラムーニの父ラクシュマン・シン（Lakshman Singh）が唱えたことばの反響でもある。彼がかなり波乱を巻き起こしそうな二人の結婚を認めたのは、リラムーニがインドのカースト最高位の家柄の娘であり、ネヴィルはイギリス貴族の御曹司だったからである。ラクシュマンはネヴィルに向かい、“She is of old Rajput family, therefore of good birth and linage, like yourself. In fact, if you had not been her equal in that, I would never give consent.”（Diver 116）と述べる。さらに、彼はインドとイギリス二国の将来のため、結婚の可能性を示唆するようなせりふも述べている。

> “… in my great wish to promote closer sympathy between two so fine countries as England and India I have often wondered would this be helped or hindered by occasional marriage, between best in both sides, It is hard to tell. … From idealistic standpoint it seems as if such combination ought to produce fine result: if only because soul of the West is masculine and soul of the East, feminine.” (Diver 117–118)

なるほど、この異人種間結婚が、他の同時代の小説と違って、波乱万丈であったとしても、最終的にうまくいったのは当然だ。同じくらい高貴な家柄のふたり、そして優位にたつ西側が男性。これはもっとも摩擦が少なくてすむ組み合わせなのである[10)]。たしかにダイヴァーは、インドの女性に高い教養と文化、知識を持たせた点で、『破滅の大河』のスーニアのような、インドの娘のステレオタイプを打破した[11)]。二国の最上のものの結びつきを謳うこの言説は、ある意味では、当時の欧亜混血に対するステレオタイプ——つまり“the worst in the two races”（Naik 72）を自らの中に混

ぜ合わせている——という一般像への挑戦であったかもしれない。しかしそのエリート優生主義は、その背後にある異人種、植民者と被植民者、ジェンダーそれぞれの不均衡性を押し隠し、超えられないはずの一線を隠蔽してしまうのである。

パリーは、『リラムーニ』を批判して、"Lilamani is quite preposterously idealized by Mrs Diver; submission to her husband's desires is her fulfillment and she is shown as possessing the delicacy, grace and hieratic manners of some legendary heroines in Indian myth"（Parry 87）と述べている。重要なのはしかし、"Mrs. Diver' s notion of the Indian ideal of wifely devotion"（Parry 87）が、ヴィクトリア朝的女性の、失われつつある理想像と一致していることである。ネヴィルの妹クリスティナ（Christina）は、リラムーニの"husband-worship"を半ばからかいつつ、"at the rate we're going, they'll soon be as extinct as the dodo"（Diver 234）と述べ、彼女のことを"you angelic little anachronism"（Diver 235）と呼びかける。

また、イギリス人社会において、リラムーニが理解しがたいのは、困窮した親戚を救うのに、夫が自分の持参金を使ってくれないことであった。ネヴィルはいかにも近代知識人らしく、妻の財産権を認めているのである。しかし、リラムーニは"It is foolishness between wife and husband, this pretending of thine and mine; especially when there is trouble."（Diver 262）と主張して譲らない。家族の中まで浸透する徹底した個人主義にリラムーニは驚き、それでインドでは決して必要ない救貧院や孤児院が、イギリスには必要なわけだと納得するのである。ダイヴァーのインドの家族制や妻の献身の理想化は、一方でイギリス人のインド文化への偏見や無知を正すものであったかもしれない。しかしながら、こういった「ドードー鳥のような」価値観の賞揚は、結局のところノスタルジックな保守思想の裏書きと等価である。

このことを念頭におくと、ネヴィルが、身分的・人種的に相応しく、一度は結婚を考えたことのあるオードリーを選ばず、リラムーニに求婚したのかが明らかになる。リラムーニは、オードリーのような急進的女性が失ってしまった昔の美徳の権化だからだ。そしてその美徳が側で支えてくれて初めて、衰退しつつある貴族のデカダンは、真に「男」として再生しうるのである。つづいては、このアングロ・インディアン・ロマンスが、世紀末のイギリス自体の問題——とりわけニュー・ウーマンとデカダンとい

う逸脱——とどうかかわっているのかについて考察していこう。

5．オードリーの追放とネヴィルの成長の物語

アングロ・インディアン・ロマンスにしばしばニュー・ウーマンが登場する（もっとも否定的な役割を担う場合も少なくはないが）のは不思議なことではない[12)]。ハズバンド・ハンティングが目的の「進んだ」女性たちも、宣教師、医師、教師として、自由と活動の地を求めて進出していった職業婦人たちも、植民地をその活動の場として選ぶことが多かったからである。なかでも、女性にしか入れないゼナナという特殊な場所があるため、インドでは女医がとりわけ貴重な存在であった。

オードリーはインドに根拠地を置く女医である。彼女は“bachelor girl”と記述され、“products of extreme reaction from mid-Victorian ideals”（Diver 36）と明確に定義されている。イタリアのホテルで、ネヴィルはこの昔馴染みの女性と再会し、こういってからかっている：“I often thought of you, and your progressive schemes, and wondered whether doctoring zenana ladies had modified your advanced views on the Woman Question, or whether you had fired them with a craving for the Suffrage—or its Eastern equivalent!” (Diver 8–9)。

先に述べたように、小説の第一部は、オードリーが保護し、教育しているリラムーニをネヴィルが、いわばさらってしまった上に、ふたりの結びつきを目の当たりにしたオードリーが、実はネヴィルを愛していたことを自覚するという、二人の女性——献身的天使タイプとニュー・ウーマン・タイプ——と一人の男性からなる三角関係を描いている。ところが、この三角形において、欲望は奇妙な方向性をもっているように見えるのである。一人の男をめぐる二人の女性というのがヘテロ・セクシュアリティの普通の方向であろう。しかし、ある意味、ここでの三角関係は、一人の女性——リラムーニ——をめぐる、男性と女性の争いを暗示する。オードリーのリラムーニへの欲望は、テキストが表向きに描こうとする以上に、ホモエロティックな方向性を示しているのである。

少なくともオードリーとネヴィルが、リラムーニをめぐってライバル関係にあることは明白だ。彼らは、タブラ・ラーサの状態にある「子ども」＝リラムーニをめぐり、どちらが彼女を自分の思い通りの型に嵌められるかを争うのである。オードリーはネヴィルに、自分がいかにしてリラムー

ニを手に入れたかをこう語っていた。

> "The daughter is the one tangible, practical result of my three years' crusade. She has been plucky enough to break through the hampering laws of purdah and caste; and is still rather shy and bewildered with it all. But at least she is here, studying medicine, under my guidance—for the present." (Diver 11)

あんなに美しい娘が医者に？　といかにも男の言いそうなことを口ばしるネヴィルに苛立つオードリーであったが、しだいにリラムーニと彼が惹かれあっていくのを目にして、心穏やかではない—— "It was absurd — almost degrading—that a woman of her good sense and convictions should allow the tone or manner of any man so to disturb her regal equanimity"（Diver 57）とオードリーは掻き乱されて当惑する。

おまけにリラムーニ自身、オードリーのような生き方には多少の懸念を抱いていたことが、つぎの彼女の心理描写からも伺える。

> There were moments when Audrey's tone and opinions faintly recalled Mataji herself. Both were capable and decisive; both slaves of a fetish. As the last word of Mataji was dastur, so the last word of Audrey was health; and … [Lilamani] came near to wondering whether, in truth, she had but exchanged one form of tyranny for another, after all. (Diver 22)

> … there were moments when the prospect of a college full of Audreys, …, seemed hardly less terrifying than the marriage from which she had fled. (Diver 67)

インドの恵まれない姉妹のために、医者となって献身するという、オードリーが彼女に描いて見せたヴィジョンは、残念ながら、リラムーニにとって意にそぐわない結婚から逃げる手段以上のものではなかったようだ。また、ダイヴァーが、オードリーのリラムーニに対する所有欲をリラムーニの母親のそれとなぞらえているのは、無意識のうちにオードリーのホモエロティックな欲望を抑圧するためだったかもしれない。

揺らぐリラムーニをネヴィルから、まさに文字通り、切り離すために、

オードリーはさらに「外科医のメスのように鋭いことばで」ネヴィルの義務について語る。

> "He ought to go home, and stand for Parliament, and then marry the right sort of girl—in his own position. The marriage of an eldest son is an important matter in England. He is less free to choose haphazard than other men." (Diver 88)

だが "the thin coating of ice laid by Audrey, could not choose but melt again in the sunlight of Nevil Sinclair's eyes." (Diver 89) というわけで、リラムーニはますますネヴィルに傾き、オードリーが要らぬ口を出したことを知ったネヴィルは怒り、急速に求婚を進めてリラムーニを奪い取ることになってしまった。

最終的に戦いに敗れたオードリーは失意と、リラムーニを奪うネヴィルに対してなのか、ネヴィルを奪うリラムーニに対してなのか、曖昧なままの失恋を抱えて退場する。彼女の怒りが二重であるのに注目したい。

> Cool as she was by temperament, anger burned in Audrey Hammond like a white flame; anger against the man who had stolen her own heart unawares, and now—in the teeth of her straight-speaking—seemed set upon wrecking her dearest project, to say nothing of Lilamani's happiness. (Diver 102)

そののち、オードリーは、第二部と第三部にもはやほとんど登場しない。ニュー・ウーマンはこうしてテキストから追放されたのである。最後に再登場するとき、彼女の役割は、リラムーニの理解ある母親のそれとなっている。リラムーニが打ち明けられずにいる妊娠をそれとなく察し、ネヴィルに暗に伝えるのは、彼女だからだ。

ダイヴァーは、エッセイにおいては女性問題についてさほど保守的な見解を取っているわけではなく、教育問題、職業問題については積極的な意見を表明している[13)]。しかし、この物語の中では、異人種婚の可能性と、イギリスとインドの帝国的発展を探るなかで、ニュー・ウーマンを骨抜きにしてしまう結末を描いてしまったのは皮肉である。それでは、もうひとつの世紀末の逸脱者、デカダン——すなわちネヴィル——についてはどう

だろうか。

放蕩息子に手を焼いた貴族が、その子をていよくインドに追放するというのは、世紀末のイギリス小説の一コンベンションであった。ネヴィルもまたそういった“the failure of the family”（Diver 9）である。彼は国に戻って貴族の義務を果たし、議員に出馬しろという父や姉の要請を無視し続け、かといってプロの画家にもなりかねて、イタリアのホテルに滞在していた。『リラムーニ』は、そんな彼が、異文化の妻を持ち、東洋の精神にインスピレーションを受けて、画家としての才能を発揮し、世間にも認められる一方、父の死を経験して一人前の、責任ある後継者として成長を遂げるまでの物語だ。“love and husbandhood had naturally made her irresponsible brother [Nevil] more of a man (Diver 197) Through her [Lilamani] and the love that was her genius, he had found, not merely himself, but a new world and new values.” (Diver 274) と述べられている通りである。ここにおいて、成長する主人公はネヴィルであり、題名となったヒロインのほうは終始変化を遂げない。

最後にネヴィルが受ける試練は、混血のまだ生まれない子どもを受け入れるか否か、という問題だが、彼はリラムーニへの愛を貫き、偏見を捨て去る。実はシンクレア家は、ネヴィルが大陸で遊び歩いているうちに重い負債を背負い、経済的にすっかり困窮し尽くしていた。

> … the heritage, for which he [Nevil's father] did care, was flung on his hands shorn of its immemorial dignity: one-third heavily mortgaged; the rest a costly burden hard to maintain on the dwindled income left to him out of the wreck. (Diver 203)

しかも、血統的にも衰退しつつあり、ネヴィルがこのままデカダンの独身生活を続けていれば、シンクレア家は跡取りを失って絶えてしまうのだ。このコンテクストにおいて彼のヒューマニスティックでヒロイックな決断を解釈すれば、ダイヴァーが意図したのとはちがう「可能性」も読み取れる。家父長的封建制を立て直すのに必要な支えは、献身的な妻でありかつ後継ぎを生んでくれる母親だ。もはやオードリーのような近代化されたイギリス人女性には期待できない存在である。『破滅の大河』において、スティーヴンを救うのが、美しく清純で献身的なイギリス人の乙女であると

いうことを思い合わせると、結局のところ、ダイヴァーとペリンは同じ枠組みの中に捉われていたということになる。

6. 結　論

今まで示してきたとおり、『リラムーニ』やその他のアングロ・インディアン・ロマンスは、世紀末イギリス国内の諸問題、すなわちジェンダー役割の新しい住み分けとそれに付随する葛藤、危機に瀕した土地所有階級、貧困に対する社会保障の問題などを映し出す鏡として、現代再読されるべきそれなりの「可能性」を持つ。ダイヴァーをはじめ、アングロ・インディアンのロマンス作家たちは真のインドを見なかったというパリーの批判は十分理解できるが、却って彼女らの作品は、世紀転換期のイギリスの諸問題を読み解くには重要な手掛かりを与えてくれるといえるだろう。

もっとも、そこに示される、それら問題に対する回答は、残念ながらヴィクトリア朝的価値観をふたたび強化するような、保守回帰であった。毅然として美しいインド女性を描き、彼女とイギリス人男性のしあわせな未来という可能性を示しながら、やはりそこにダイヴァーの思考の枠組みの古さが露呈する[14)]。

過去何度か、インド帝国もの小説（Raj Fiction）はイギリスでノスタルジック・ブームを見た。1970年代はその一つで、ポール・スコット（Paul Scott）のラージ四部作（*The Raj Quartet* 1966–1973）はベストセラーになり、テレビ化されて話題を呼んだ。続編 *Staying On*（1979）はブッカー賞を取っている。ロマンス作家の作品群は、さらにインド生まれのイギリス人女性作家M. M. ケイ（M. M. Kaye）にも連なり、彼女の小説 *The Far Pavilions*（1973）はテレビ化されたのち、21世紀になってからもウェストエンド・ミュージカルとなり、イギリス人将校とインドの姫君のロマンスがいまだ健在であることの証明に、2005年現在もロンドン地下鉄の壁をポスターで飾っている。このことを考えても、アングロ・インディアン・ロマンスが今なお、人種・階級・ジェンダーにおいて微妙な読みを必要とする場である「可能性」に疑いはないのである。

注

1）アングロ・インディアンということばは、この当時は在印イギリス人を指していた。イギリス人とインド人の混血の人々はユーラシアンと呼ばれていたが、差別的な含みのあるこの用語は、しだいにアングロ・インディアンということばにとって代わられ、現在では、アングロ・インディアンといえば英印混血の人々のことを指すようになっている。この論文においては、便宜上、作品執筆当時の慣習に習い、在印英国人のことをアングロ・インディアンと呼ぶことにする。

2）アニンディオ・ロイ（Anindyo Roy）は、アングロ・インディアン・ロマンスは、本国で60年代に栄えたセンセーション小説の直系の子孫であると位置づけている（*Civility and Empire* 93）。

3）彼女の研究については、エドワード・サイード（Edward Said）も“She was the first to study the significance of literature to the Raj's power”と述べている（裏表紙の評より）。

4）スティールについては次の一章を費やして分析しているが、結局、パリーはスティールもまたインドについてのイギリス人の偏見に満ちたイメージを増長するのみで、インドについて、またイギリス人のヒロイズムについての幻想を維持するにとどまったと結論づけている（125）。

5）その後、1991年に M. K. ナイク（M. K. Naik）は *Mirror on the Wall* を著して、シンやパリーがカヴァーしていない二十世紀後半のアングロ・インディアン・フィクションを含め、テーマ別の概説を行なっているが、理論的な分析というよりは総括的紹介に近い。

6）Patrick Blantlinger, *Rule of Darkness*: *British Literature and Imperialism1830–1914* (1988), Stephen Arata, *Fictions of Loss in the Victorian Fin de Siecle* (1996) に詳しい.

7）もちろん「妊娠」などということばがあからさまにテキストで使われることは一度もなく、仄めかされるだけであるが。

8）ナイクも“... these novels mostly project the view that a union of this nature is bound to fail completely.”（Naik 77）と述べている。

9）Nautch は踊り子の意味である。

10）『破滅の大河』では、橋梁技師で本国では卑しからぬ地位のイギリスの男性と、使用人クラスのインド女性、スティールの *Voices in the Night*（1900）では、ちょっと過激なイギリス人女性とブラーミン、すなわちハイ・カーストの男性、クロスの *Life of My Heart*（1911）は、もっとも過激な例で、ニュー・ウーマンと労働者階級のインド人男性との結婚が描かれ、どれも何らかの形で破局を迎える。

11) だからこそ、ダイヴァーはリラムーニに宗教を捨てさせなかったのである。キリスト教に改宗したら、彼女はカーストを失ってしまう。また、インドの女性の教育に、真剣な興味を抱いていたダイヴァーは、インドにおける宣教師系の学校が、改宗を目的にしているがため、ハイ・カーストの女性が教育を受けられないというジレンマを嘆いていたのも事実である (Diver *The Englishwoman in India* 1909)。

12) 『破滅の大河』にも、婚約者がいながら、あけっぴろげにスティーヴンに恋を告白するルー (Loo) という娘が登場する。

13) *The Englishwoman in India* では、ダイヴァーはインドの女性の教育に尽くした英国人女性のみならず、階級性や父権社会の軋轢をはねのけて大学教育を受けたり、医師の資格をはじめて取ったインド人女性を紹介し、その功績を讃えている。

14) 『リラムーニ』の続編、*Far to Seek* (1921) において、シンクレア夫妻の混血の息子ロイ (Roy) の生涯が描かれるが、彼は際立って気品にあふれる青年として描かれており、自らと同じ人種的カテゴリーにあるはずのユーラシアンたちを軽蔑の眼差しで見ている。人種の壁が超えられたとは言い難いのである。

参考文献

1) 第一次資料

Diver, Maud. *The English Woman in India.* Edinburgh: William Blackwood and Sons, 1909.

——. *Lilamani: A Study of Possibilities*. Oxford: Oxford University Press, 2004.

——. *Far to Seek: A Romance of India and England.* Edinburgh: William Blackwood and Sons, 1920.

Perrin, Alice. *The Waters of Destruction*. London: Chatto and Windus, 1905.

2) 第二次資料

Arata, Stephen. *Fictions of Loss in the Victorian Fin de Siecle.* New York: Cambridge University Press, 1996.

Blantlinger, Patrick. *Rule of Darkness: British Literature and Imperialism1830–1914.* Ithaca: Cornell University Press, 1988.

ハイアム、ロナルド『セクシュアリティの帝国：近代イギリスの性と社会』本田毅彦訳、東京：柏書房、1998. (Hyam, Ronald. *Empire and Sexuality: the British Experience*. Manchester: Manchester University Press, 1990)

Ledger, Sarah and Tom McCracken, eds., *Cultural Politics at the Fin de Siecle.*

Manchester: Manchester University Press, 1997.

Meyer, Susan. *Imperialism at Home: Race and Victorian Women's Fiction*. Ithaca: Cornell University Press, 1996.

Naik, M. K. *Mirror on the Wall: Images of India and the Englishman in Anglo–Indian Fiction*. New Delhi: Sterling Publishers, 1991.

Parry, Benita. *Delusions and Discoveries: India in the British Imagination, 1880–1930*. London: Verso, 1998.

Paxton, Nancy L. *Writing under the Raj: Gender, Race, and Rape in the British Colonial Imagination, 1830–1947*. New Brunswick: Rutgers University Press, 1999.

Roy, Anindyo. *Civility and Empire: Literature and Culture in British India 1822–1922*. 1972. Abington: Routledge, 2005.

Sharpe, Jenny. *Allegories of Empire: The Figure of Woman in the Colonial Text*. Minneapolis: University of Minnesota Press, 1993.

Singh, Bhupal. *A Survey of Anglo-Indian Fiction*. London: Oxford University Press, 1934.

Ware, Vron. *Beyond the Pale: White Women, Racism and History*. London: Verso, 1992.